

衆院2区補選・市長選・総選挙・知事選…

サポーターは見た

選挙イヤー

仙台市の啓発団体

菅原正和会長に聞く

四月の衆院2区補選に始まり、仙台市長選、総選挙、知事選・県議補選と選挙続きたつた今年の仙台市。若者の投票率低下を抑えようと、市民ボランティアが結成した「選挙サポーター」も、投票呼び掛けに声をかりした一年だった。「選挙イヤー」はサポーターの目にとつ映り、どんな思いを抱いたのか。サポーターの会の菅原正和会長に聞いた。

「この一年、どんな活動を展開したのか。」

「街頭での呼び掛けが中心だった。大学キャンパスなど若者が集う場所を選んでは、二十代のサポーターが先頭に立って訴えた。マスコミや若手ミュージシャンと連携して、選挙啓発CDも製作してみた」

「その成果は。」

「立て続けに選挙があつたため、サポーターの存在は広く知られたが、投票率アップには結び付かなかった。呼び掛けへたけれど、心を動かすの反応は予想以上に良は簡単ではなかった」

若者にあきらめムード

活発な政策論争不可欠

? 選挙サポーター 若者の政治離れと投票率低下を食い止めるため、仙台市選挙管が2004年5月、公募により発足させた選挙啓発ボランティア。選挙期間中の街頭活動のほか、将来有権者となる小中高生への啓発、選挙関連イベントの開催などに取り組む。04年7月の参院選から活動を開始し、現在は会員99人。

「大学での啓発活動で耳にしたのは、『なぜ投票に行かなければならぬの?』という声。若者には政治へのあきらめムードがある。大人はこの」

「戦いの構図や政治対立ばかり注目されたが、身近な選挙こそ活発な政策論争が不可欠。『投票に行こう』との呼び掛けにも説得力が増す。マニフェスト(公約集)型となった市長選の方が、知事選より投票率が高かったことはつなげたい」

「この一年の活動は選挙サポーターと言つてもいいと思う。従来型の選挙啓発を打破しようとしたと思う。従来型のお手伝いにとどまらなかつた。行政にはできない、市民ボランティアならではの役割を果たして、『何かが変わる』との期待を抱かせたい」

「原因はどこにあると思うか。」

「疑問にきちんと答えるべきで、『投票しない』と何も変わらない』と力説したこともあった」

「ただ、郵政民営化問題が争点となった解散総選挙が、若年層を含めて高い投票率だったように、政治が変わるとの期待感さえあれば、若者も投票所へ足を運ぶはずだ」



すがわら・まさかず 1960年、仙台市生まれ。東北学院大卒業。日専連勤務を経て、95年に家業のカラオケ店店長。2004年選挙サポーターに応募し会長に。45歳。

今年の選挙 仙台市の投票率

| | |
|--------|--------|
| 衆院2区補選 | 36.75% |
| 仙台市長選 | 43.67% |
| 総選挙 | 62.24% |
| 知事選 | 37.99% |
| 県議補選 | 38.85% |